初めての南半球　　2005.5.4～11

ユニオンジャックと
サザンクロスの国

退職後の大きな楽しみとしていた、外国旅行の第一弾としてニュージーランドを訪れることに。事前の勉強もして、初めての夫婦海外旅行に備えた。

1 ニュージーランドの生い立ち

1642 年オランダ人のアベル.タズマンが、初めてニュージーランドを発見した。それまではマオリ族によってアオテアロア(白く長い雲のたなびく国)と呼ばれていたのを、母国オランダのゼーランド州にちなんで「ノヴァー.ゼーランド」と命名した。これが後に英語名のニュージーランドの由来となった。その後 1769 年ジェームズ.クックがニュージーランドを測量してイギリスの植民地となった。しかし、植民地となっても金になるものは見つからず、地球の反対側ではるかに遠かったのでそのまま放置されていた。
1776 年アメリカが独立してから、イギリスは流刑地としてオーストラリアとニュージーランドを指定して、イギリスから白人がやってくるようになる。1840 年にイギリスとマオリ族とで、ワイタンギ条約が結ばれ白人が本格的に住むにようになった。白豪主義で、オーストラリアと共に黒人もアジア人もまったく入れず、白人の天国でイギリスが社会福祉を導入する時は、このニュージーランドで実験してうまくいくと本国にとり入れたのである。そのため「ゆりかごから墓場まで」の社会福祉が完備している。1947 年イギリス連邦から独立した。

2 ニュージーランドの自然と生物

日本と同じ緯度にあり、温帯であるが日本とは少し違う。日本はすぐ横にユーラシア大陸があり、その影響を強く受けるがニュージーランドはオーストラリア大陸は小さいし、少し離れているので海洋性の気候で、夏でもあまり暑くならないし、冬でもそんなに寒くない。
北島のオークランドでは冬でも雪は降らないし、霜も降りないのだ。しかし、日本と同じ火山国で温泉も多い。南島にはサザンアルプスが走り氷河がある、その氷河が削ってできるフィヨルドが多く見られる。
これは北欧のスカンジナビィア半島、チリ、アルゼンチンのアンデス山脈と並ぶものである。日本の北海道に氷河がないのは、高い山がなかったからである。ニュージーランドには飛べない鳥が多い。もともとニュージーランド

には哺乳類がいなかったので、身を守るために飛ぶ必要がなく、羽が退化してしまった。そんな鳥が 12 種類もいたが、白人が移り住み犬や猫が入り込みまたたく間に 8 種類は絶滅してしまった。今も生存するのはキューイバード、タカヘ、トケコだけである。

3 今のニュージーランドは

人口約 400 万人、首都はウエリントン、公用語は英語とマオリ語、宗教はキリスト教、通貨はニュージーランドドル（１ドル８０円）、主な産業は木材、パルプ、食料品加工、ソフトウェアー、軽工業。観光客は 1 年間に 100 万人が訪れている。 輸出は羊毛、肉、乳製品、木材、果物。輸入は機械、自動車、プラスチック製品。
議会は一院制で、首相は女性のヘレンクラーク、国旗は表紙のように、ユニオンジャックとサザンクロス（南十字星）、首都はウエリントン、しかし人口は 16 万人と少ない。一番の大都市はオークランドで 105 万人、つまり 1/4 が集中している。

4 なぜ羊毛の国になったか

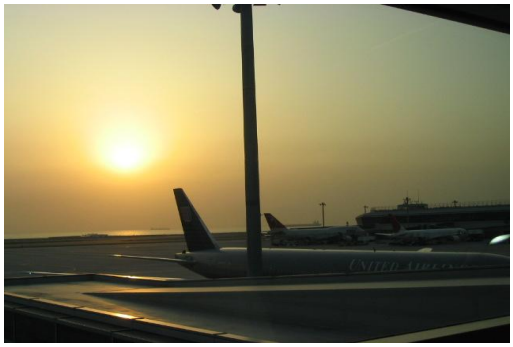
人口 400 万人に対して羊は 7000 万頭もいる、なぜこのように羊が多くなったかといぅと、ニュージーランドが植民地だったことに起因している。
つまり何ヶ月もかけてイギリスに運ぶため、腐らないものでなければならなかったのだ。そのため羊が飼われた、ただそれだけのことだったのだ。

5 ポプラ街道とニュージーランドの 大自然８日間

5/4～5/11 の日程でクラブツーリズムのツアーに、友達夫婦と一緒に参加した。最初の旅はスイスへと思っていたのに、ニュージーランドへ先に行くことにしたのは、ガイドブックの黄葉に引かれたからに他ならない。
黄色を表現する多くの言葉と写真のとりこになってしまった。黄色を探しに.....日本人は幸運にもその色彩を表現する言葉を持っている。黄金色、美しく澄んだ刈安色、レモンの皮が少し緑がかった檸檬色、からし色、山吹色、くちは色、おみなえし色、利休色.....。こんなにあるとは知らなかった。
総勢２６名ツアーコンダクターは周防喜久子さん，その後大変お世話になることになろうとは.....。

5月４日セントレアを出発

　夕日に染まるセントレアを、ニュージーランド航空 NZ-036 便はほぼ定刻の 16.55 分に出発した。
機内はほぼ満席で、日本人の旅行客がいかに多いことか。夜の機内で一夜を過ごすのは初めてである。少しは眠らないと思うのだが、スクリーンには一晩中映像が映し出されておりなかなか眠られない。少しは眠りやすいように配慮するかと思ったのだが。サービスの真の意味が理解されていないようだ。飛行機は 11000M の成層圏を、910km で順調に飛行して 10 時間で朝 8.00”にオークランド国際空港に着陸した。しかし疲れる、もう少しなんとかならないものかと思ったのは私一人ではあるまい。


夕暮れのセントレアを出発

オークランド国際空港に到着

二日目

クライストチャーチへ移動

オークランドで国内線に乗り換えて、11:00 の NZ-525 便でクライストチャーチに向けて飛び立ったのは、20 分遅れであった。
運良く窓際の席で、景色を眺めることが出来た。飛び立つとすぐに空港の全形がおもちゃのように見えた、すばらしいお天気である。
南島の北端ファウェル岬(さようなら岬)の砂浜が、錨の形のようにくっきりと眺めることができた。

国内線に乗り換えるためのバス待ち

南島の北端ファウェル岬

続いて目に飛び込んできたのは、赤茶けた禿山ばかりの景色であった。木が一本も見えない、不思議な光景だ。しかし、少し飛ぶとカンタベリー平原の緑が広がってくる。きれいに区画されパッチワークみたいである。
そんな中にグラウンドのトラックのような形がいくつか見られた。なぜあんな形になっているのか.....分からなかった。そのうちにサザンアルブス山脈の、白い峰が現れてクライストチャーチに到着した。すでに 12:40”である。

禿山が続く

トラック競技場かと....

バスで市内へ移動して、大聖堂の横のヘリテージホテルにてやっと昼食となった。このホテルは元の市庁舎の建物を利用しているとのこと。食事は魚、ジャガイモ、ブロッコリーとさほど珍しいものでもなかったし、さほどおいしいものでもなかった。ただ、旅を通してすべてそうであったが、われわれが行く所には必ず日本語の話せる、日本人がいたので飲み物などのオーダーはとても楽であった。

落ち着いた雰囲気の街クライストチャーチ

食事の後付近を散策した、石造りの大聖堂は圧倒的な存在感で鎮座している感じがした。中は天井が高く、かなり広いものだった。すぐ前にトラムの停車場があったので、乗りたかったのだが一周すると 30 分もかかり時間がないのと、19.5 ドル（１５４０円 ）と高かったのでやめて付近を散策した。

トラムが見える風景

街中の黄色をバックに

女性陣はウィンドショッピングへ、われわれは何でも見てやろうと近くをうろついた。そこで見つけたのが南極探検家スコットの像、彼は後一歩のところでアムンゼンに先を越された、そればかりか帰らぬ人となったのだ。
そんな像が建っている公園は大きな木がたくさん茂り、日本の短く刈り込まれた街路樹とは雲泥の差だ。
このあとハグレー公園、追憶の橋をバスから眺めながら市内をまわり、小川が流れ緑の芝と緑の木々が連なり広がるモナベイル邸を散策した。
なんと心地よい散策であったことか、どうしてこんなに芝生がきれいなのだろう。日本では芝があると立ち入り禁止の立て札があったりするのだ.....。
それに芝生に雑草がないのが不思議である、どのよぅな手入れをしているのか??　それに小川の水は上高地のよぅに澄んでいる、街の中なのに!!
その隣はクライストチャーチ女学校の運動場になっており、生徒がホッケーの練習をしていた。手を振ると、おなじように手を振ってくれたのがうれしい。そして街の全体が見渡せる丘から眺めると、街の中心部にほんのわずかにビルが建ち、それ以外は木々にかくれた屋根がのぞく風景が広がっていた。

ホテルはキングスゲート.オートロッジ、部屋は１０３号室ドアの外は駐車場になっており、なんとなく落ち着かない。でも部屋はかなりの広さがあり十分である。こうしてニュージーランドの一日は無事に暮れた。

大聖堂とカップル(逆光でした)

スコットの像

三日目

クライストチャーチの朝

6:15”のモーニングコールだったが少し前に起きた。7:00”にはトランクを出さなくてはいけないので、あまりのんびりとはしておれない。身支度をしてレストランへ、朝食はごく普通のバイキングだった。おばさん連中の皿にはたくさんのご馳走がのっていたが、私は控えめにしてパンと紅茶に少しだけごちそうを皿にのせた。なるべく普段のペースを崩さないようにしようと思ったからだ。
食事の後外に出てみた、セーターを着ていてもひんやりする程である。それなのに自転車で通勤する人は、6人見たうちの５人は半ズボンなのにびっくりした。寒くないのか不思議なくらいだ。少しぶらついてみたが、あたりはモーテル街になっておりたくさんの看板が並んでいた。周りの家は大きくはないがこぎれいで、庭の木はいずれも隣の敷地に入り込んでいる。日本ならすぐにもめごとになるほどだ。とにかく、木は自然に生長するがままの姿でなくてはいけないのだろう。それに何か日本と違うと感じていたのだが、気

がついた。電柱と電線が見当たらないのだ。地下に埋設されているようだ。すばらしい!!

モナベイル邸前の小川

朝のハグレー公園

テカポ湖からワナカへ向かう

8:00”に出発し街の中を通り抜け、ハグレー公園の横を通った時は緑の芝生が朝日に輝きえもいわれぬ美しさであった。そんななかをジョギングしている人も見えた。　市街地をしばらく走ったがアイスクリームの工場以外に工場らしいものは見当たらなかった。郊外に出るとバスはかなりのスピードで走る、この運ちゃんは少し荒いなと思ったがなんのなんの、制限速度は100 になっている。その後も見ていると 80 とか、カーブでも 75 の標示だったりしてびっくり。
直角に曲がるときでも 55 だった。とはいえ、とにかく車が少ないので走れるのだ。周りの景色はだだっぴろい平原が続き、あるのは牧場だけ。そこで見つけたのが巨大なスプリンクラー。

これがニュージーランド

巨大なスプリンクラー

ミルキーブルーに輝くテカポ湖

平原と羊だけではない、いたる所で黄色が迎えてくれる。路の両側に大きなシルバーバーチ(白樺の一種)がずらりと並び、すばらしいの一言に尽きる。そんな光景にあちこちで出くわすのだから感激してしまう。
かと思えば、ニュージーランド原産のパソックが平原を覆う光景が続くのだ。そんな景色に酔いしれているうちにテカポ湖に到着した。ここにはヨーロッパから移民してきた、開拓者たちが建てた「善き羊飼いの教会」が残っている。日本では考えられないが、外国では宗教が生活の基盤であり心の礎であることがうかがえる。
　それにしても美しい湖で、水がミルキーブルーと呼ばれているのだ。ここで昼食、日本料理の湖畔でサーモン丼(ちらし寿司みたい)を食べたが米がけっこう旨かった。やはり日本人向けのものなのだろう。

テカポ湖と教会をバックにスマイル

プカキ湖にも立ち寄る

テカポ湖から少し行った所に、マウントクックの入り口に横たわるプカキ湖がある。お天気がいいのでここにも立ち寄ったが、これがまたすばらしく美しい。遠くにマウントクックを望む湖に、雲がたなびきこれがまたすばらしい美しさだ。ビューティフル!!水の色は透き通って、吸い込まれそうなくらいで、この美しさはたとえようがない。

快調にバスは走り 14:00”に途中オマラマにて休憩、ここでガイドさんが旨いというアイスクリームを食べた。2.5 ドル(200 円)だったが、アイスクリームの味に変わりはなかった。

遠くにマウントクックを望むプカキ湖

それからさらに二時間走りワナカ湖畔に到着、マウントアスパイアリングホテルに入った。一時間少しの余裕があったので、湖畔を歩き街をうろつくことにして出かけた。友がワインが欲しいというのでスーパーへ入った。というのもホテルだとボトルで２０ドル以上もするので、安く仕入れることにしたのだが.....。ワインは選ぶのに苦労しないのだが、コルク抜きが分からず店員と押し問答して、やっとのことで見つけることができた。これも楽しい旅の思い出になった。
ホテルの夕食ではビールを一杯だけ注文して、あとはこっそり持ち込んだワインを飲んで満足したしだい。
部屋は今回も一階の１９号室友は隣の２０号室、ここでハプニングが発生。友の部屋のバスルームの天井から水が漏れてきて大騒ぎ、言葉が旨く通じなくてガイドさんに連絡して落着。結局友は二階に部屋替えとなった。

四日目

牧場見学と黄葉のアロータウンへ

6:30”に起こされて湖畔の散歩に出かけた、まだ薄暗く太陽は見えない。湖畔から日の出を見ようとしたのだが、まだ人の気配はなく街は静まり返っている。道筋で小ぶりのリンゴが、たわわに実っているのを見つけた。姫リンゴの木もあった。家の前にはボートが、台車にのっている所が多く見受けられ車はというと路上駐車がほとんどだった。湖岸を歩くとポプラの大木が

立ち並び、自然のすばらしさに圧倒された。かたわらにはすすき(グリーングラス)も白い穂をなびかせていた。
ホテルの庭の前ではポプラのライトアップがされて、その隣にはぶどう畑が広がっていた。日の出は遅く 7:00”すぎで、あたりが赤く染まって見えるが丸い太陽は見えなかった。ホテルに戻り食事のあとゆっくりと 9:30”の出発である。本日は時間に余裕があるので、湖畔の散策とワナカの街と湖が展望できる丘とベーコン岬に立ち寄った。なかでも湖畔の散策は、明るい緑の木々と落ち葉のコントラストがたまらなくすばらしかった。こんな所を二人だけで４０年も前に歩いたらどんな気持ちになったことか。

ワナカ湖の朝

すばらしかった湖畔の散策

タラス村のクラウディーピーク牧場

11:40”に牧場に到着し、野外での昼食である。ここでは子供たちが絵葉書や飲み物を売るお手伝いをしていた。パワーさん一家はご夫婦に子供一人だが、奥さんはオーストラリアへ旅行中とかで、お手伝いさんとご主人で接待してくれた。メイン料理はソーセージとチキンを串に刺して焼いたもの、サラダにデザートそしてクッキーにコーヒー。小瓶のビールはここでも５ドル、ワインより安くて飲みやすいのでもっぱらビールを飲む。野外でしかも大勢で囲む食卓はにぎやかで、楽しい食事である。

真っ赤な紅葉の下で

楽しい食事

食事としては驚くほどでもないが、食後のデザートはいいとしてケーキを食べる習慣は理解できない。もっとも女性陣は大喜びであったが。きっとこの旅行から帰ると、また太ってしまったと嘆くのではと思う。

羊の毛刈り

食事の後は羊の毛刈りショーだ。まずは牧用犬が主人の口笛一つで、羊たちを牧場から建物の中へ追い込んでくる。見ていると犬はほえてはいないが、目で威嚇するのだそうだ。遠くにいた羊たちは、あっという間に建物に追いやられていた。いよいよ毛刈りが始まったが、さすがにプロはうまいもので瞬く間に一頭の毛を刈り取ってしまった。仕事でやる時には一頭を一分で刈ってしまうというから驚きである。

一匹の羊の毛からはセーター4 着分がとれるそうだ。この牧場では最高級のメリノを 7000 頭、犬７匹、3 人のワーカーと、4000 ヘクタールの牧場をもとに経営している。収入を聞いたが直接聞くことは無理なので、応えてくれたのは羊の毛は一匹２０ドル、年２回毛を刈る。肉は一匹６０ドル、ワーカーは１日１６０ドルという。これを計算すると２４１，６００ドルで、１９，

３２８，０００円に肉の売り上げが加わることになる。したがって一割を肉にしたとして３３０万円ほどになり、合計は２５００万円くらいか。

目で威嚇する犬

手馴れた手つきで毛を刈る

黄葉がすばらしいアロータウン

タラス村を出て、クロムウェルのフルーツショップで休憩の後一路アロータウンへ。この街は金が発掘されて栄えたもので、昔の街並みが再現されている。街に入る手前は、黄葉の大木が路の両側に茂っておりこれまたすばらしい眺めである。お店の品はどれもお高くて手が出ないので、川原を散策して自然の美しさにふれることでニュージーランドを満喫した。

クロムウェルのポプラ　と　アロータウンの黄葉

このあとクイーンズタウンまで走る。クイーンズタウンとは女王が住むにふさわしい所というので名前がつけられた。

そんな街を一時間ほど散策して 18:00”にゴールドリッジホテルへ入った。部屋は５０２号室、高台にあり眺めもよく星空がとてもきれいでロマンチックなこと。

五日目

世界遺産のミルフォードサウンドへ

目を覚ますと小雨が降っていてかなり寒い朝である。今日はこの旅一番のメインである、フィヨルドランド国立公園のミルフォードサウンドへ一日がかりで出かける。
そのため朝食は 6:20”におにぎりが部屋に配られたが、これがなかなか旨い。そして 7:00”に小雨のなかを出発した、現地のお天気が晴れることを念じるのみである。街を出てしばらく走ると、ワカティプ湖畔とリマーカブル山脈のあいだを走る。あたりを見渡すと、なんと白く薄化粧をしているではないか。昨夜の冷え込みで早くも冬の景色になっていた。

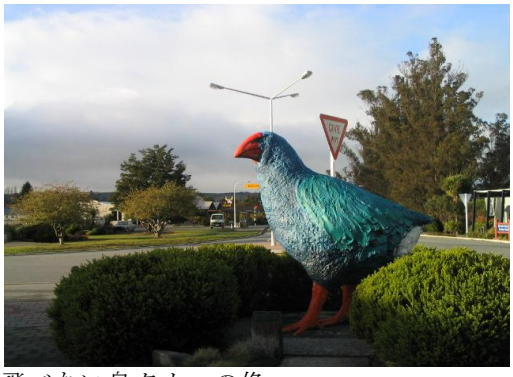
聞けばクィーンズタウンの今朝はマイナス二℃だったそぅだ。そしてさらに車を進めると、コージーヒルというあたりでは雪が舞ってきたのだ。秋と冬の景色を同時に見られラッキーというべきか。

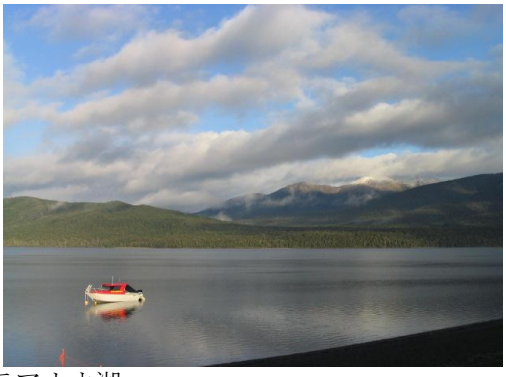
最近はシカが多く飼われている

２時間ほど走ったところでモスバーンという街を通る、ここはニュージーランドにおける牧鹿業の発祥地だという。
ニュージーランドといえば羊しか知らなかったが、アカシカ、ヘラジカと日本シカが 170 万頭飼われているそうだ。近年特にシカが増えてきたその理由は肉が高く売れるのと、皮、角も売れるし捨てるところがない。血も捨てない、そればかりかコップ一杯 8000 円もするのだとか。
ほかには牛は肉牛と乳牛がそれぞれ 500 万頭も飼われているのだ。おそらく羊毛は化学繊維にとって変わられる日が近いだろう、そのためにシカが多く飼われるようになってきたのだ。

テアナウで小休憩

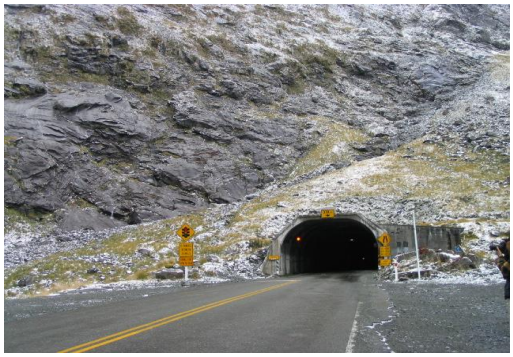
2/3 ほどきたテアナウの街で休憩した、2 番目に大きな湖テアナウ湖のほとりにある。時間は 10:00 ころでお天気は快晴である。ニュージーランドのお天気は小刻みに変わるということだが、朝の雨、途中の雪からして今の快晴は不思議な感じがする。
街角にこの国原産の飛べない鳥のタカへの像が置かれている、この鳥はテアナウ湖の向かい側マーチソン山脈に、200 羽程が生息しているという。まさに貴重な鳥である。


飛べない鳥タカへの像


テアナウ湖

ホーマートンネルの前後で休憩

テアナウを出てミラー湖に立ち寄った、風がないと湖面に山々の景色が鏡のように映る美しさで有名な所だ。しかし、少し風があり山はゆれていた。ほどなく標高 900m のホーマートンネルに到着した。



岩盤をくりぬいたホーマートンネルとその頂

岩山が目の前にそびえ圧倒されそうである、が寒い。このトンネルは 19 年の歳月をかけて完成したもので、これによりミルフォードサウンドへの足が確保されるようになった。しかし、一車線分しかなく入り口には信号機がある。これまで街の中以外では信号機など見たことがないのに。あまり寒かったので早々にバスへ戻った。トンネルを越えた展望台でもバスを降りたが、ここにはケアという鳥が観光客にえさをねだっていた。ちょうどハト位の大きさの黒っぽい色をしていた。

12:30” ミルフォードサウンドに到着

ついにやってきた、お天気は快晴。目の前に入り江ととんがり山が連なるあの景色があった。船は 13:00” 出港なので、それまで港の端にある灯台までいってみる。とんがり山と船がまるで絵のように浮かんでいる。

初めて見るミルフォードサウンドの景色

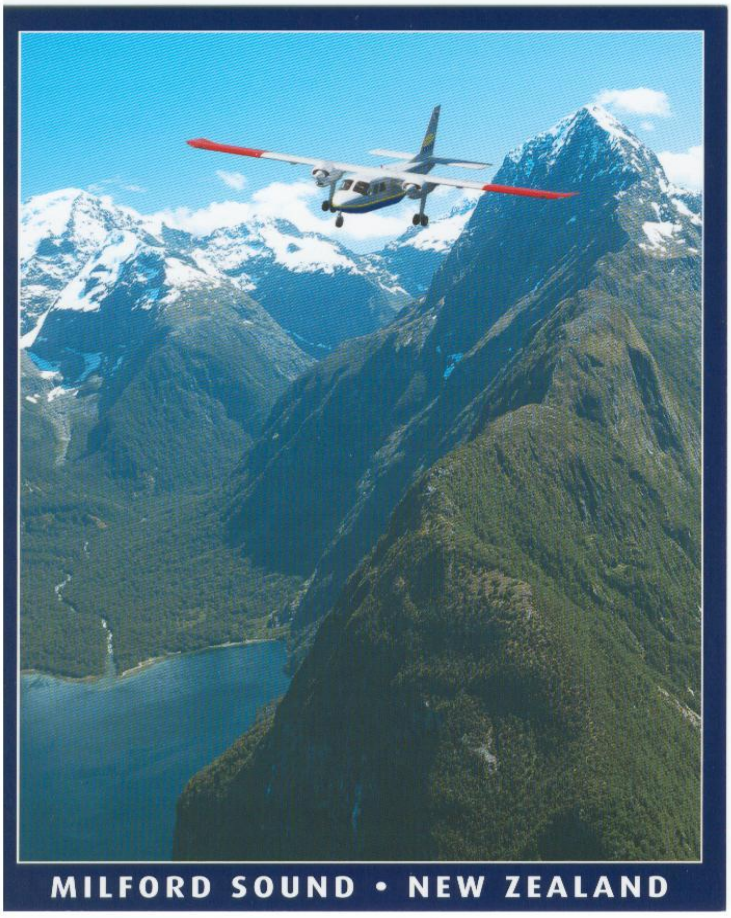
いよいよ出港、乗船するとすぐに昼食のお弁当だ。驚いたことにここでも若い日本人の女性が働いているのだ。まだハイティーンと思われる可愛い子で、少し話をしたが万博は見たいといっていた。
食事を終わってデッキに出た。すばらしい眺めだ、空の青さと海の青さがどこまでも広がり、柔らかな風がまた心地よい。こんなデッキで寝転がって、時を過ごすことができたら最高だろうに。途中のビューポイントでは減速してくれる、マイターピーク、オットセイ、ボウエン滝、スターリング滝から外洋まで出てＵターンする。
氷河によって削られた地形は、Ｕ字型になっておりよく分かる。200 万年も昔に氷によって削られフィヨルドが出来たなんて、ほんとに氷で削られるのか信じられない。1 時間 40 分ほどの遊覧だったが、すばらしい眺めに十分満足することができた。

ひずるいほどのお天気

この景色は広角レンズでないと無理である

15:00”にミルフォードサウンドを出発して帰路に、メンバーの内３人はセスナで空からクィーズタウンへ帰った。この料金は３００ドル(24000 円)。18:30”にはクィーンズタウンに到着して、夕食は中華。ゆっくり食事して昨日と同じゴールドリッジホテルに戻ったのは 20:30”。
星がとても綺麗で、南十字星、オリオンも輝くすてきな夜だ。きっと明日のマウントクックもすばらしいお天気になるだろう。

空からのミルフォードサウンド



六日目

マウントクック(アオラキー雲を突き抜ける山)へ

今朝は 7:00”にホテルを出て中華料理店でおかゆの朝食だ、これがけっこういける味でなかなか旨かった。そしてマウントクックのハミテージホテルへ向けて出発した、予定では４時間かけて 12:00”に到着する。前日走った路を戻りクロムウェルで小休止した、そして出発の時間になってもバスが動

かない。どうしたのかなと思っていたら、ガイドさんの説明がありこの先のリンディース峠付近で交通事故があり開通の見通しがたっていないという。迂回路はなく開通を待つか、コースの変更をするかの選択をしなければならないというのだ。少し待って情報を確かめてから判断することに。ほかにも３台バスがとまっていた。
初めてのトラブルである、少しして 12:00”ころには開通するとの情報があり行けるところまで行って待つことになり出発した。
しかし、まもなく止められて結局クロムウェルの街に引き返した。

思わぬ体験

おかげでふつうなら見学できない、田舎の街を散策する機会ができた。女性陣はスーパーへでかけたが、こちとらはのんびり景色を眺めていた。
けっこう冷えてきたので、カフェーにコーヒーを飲みに入った。注文するのに私はカプチーノを頼み,奥様方は普通のコーヒーがいいというのでメニューを見たのだが、わからない文字しか並んでいないのだ。
そこでレギュラーコーヒープリーズとやったが通じない、やむを得ず一番上に記載されているのを指差した。確かホワイトなんとかとなっていたのだが、ミルクの入ったコーヒーで OK だったので一安心。
カプチーノもホワイトなんとかも 3.5 ドル(280 円)で、値段はまあまあかな味もよかった。あとでガイドさんに聞くと、レギュラーコーヒーとはサイフォンで抽出するものをいうのだとか。やれやれこんな事すら話せないとは情けない。

クロムウェルのポプラ並木

街の入り口

しかし、田舎町だったがきれいにかつ機能的に作られていると感じた。見ていたら大型のトレーラーが入ってきて、運転手が降りてトイレを済ますとじきに出て行った。

街の入り口にはトイレがあり,その前の道路は少し幅が広くなっていてバスや大型トラックの駐車レーンになっているのだ。これなら特別なスペースを作らなくても大丈夫である。それに緑がいっぱいある。11:00”にここを出発したが、事故現場の手前でまた待たされて結局 12:20”に通過することが出来た。羊毛を積んだ大型トレーラーが凍結でスリップして横転したものだった。

羊が道路を埋め尽くす

その後は順調に飛ばしてオマラマでトイレ休憩、そのあともひたすら走り続けた。ところがおかしなもので、急いでいる時に普段ならめったにお目にかかれない光景に２度も出くわしたのだ。羊の群れが道を渡っているのだ、だれも誘導している気配はないが犬はいたようだ。のんびりと移動している、こちらの気持ちなど知る由もない。しかし、これはシャッターチャンスとみなが一斉にカメラを向けた。この間バスはのろのろとしか走りようがないのだ、羊が去ってから分かったが、人間様は最後尾を四駆で移動していた。

二度も出くわした羊の群れ

プカキ湖が美しいすがたを見せ始め、いよいよマウントクックに近い所までやってきた。やれやれこれでほっとした、結局２時間以上遅れて 14:15”に到着した。そのためマウントクックの出発は 16:00”とされた。

ちっとも旨くないハミテージホテルのランチ

到着してすぐにバイキング方式のランチとなったが、ガイドさんが通訳してそれぞれ欲しいものをオーダーするのだが、何があるのかよく分からずパンにスープとサラダをもらう。それにケーキを一つのせた。

しかしサラダはハッパだけで、ドレッシングがどこか分からずそのうえ狭いテーブルで食べずらく不満。
どうもお客さんが多くて、料理のいくつかはなくなっていたのだ。それもしかたのないことかな 14:00”を過ぎていたのだから。

美しく白い雲を突き抜ける山マウントクック

早々に済ませて景色を堪能すべく屋外に出た。お天気は最高、マウントクックの氷河もはっきり見える。すばらしい眺めが眼前にひろがり思わず何回もシャッターを押した。
時間を有効にと登れる所まで登ってみる、同じ景色でも高さが変わるとまた変わって見える、その度にシャッターを押す。

ハーミーテージーホテルを眺める

運転手のミスターエディスと

こうしてマウントクックも快晴に恵まれ、すばらしい姿を見ることが出来クライストチャーチまで戻るだけになった。

まだあったハプニング

プカキ湖に映る白い山々を横目に、バスは一路クライストチャーチに向けて出発した。テカポ湖あたりまではなんとか日が残っていた、そして真っ赤な夕焼け雲がきれいに浮かんで、これもきれいな絵になるひとこまだった。

美しい夕焼け雲

まもなくあたりは暗闇になった、そして、トイレ休憩にグラルディーニという小さな街に寄った。ところが、ここでまたハプニングが発生した。
トイレの明かりがつかないのだ、スイッチが分からなくて運転手も街の人に確かめに行くも、人がいなくて分からない。やむを得ず小さなペンライトを持っている人がいたので、女性陣はその明かりで用を足した。おかげでかなりの時間を費やしてしまった。これも忘れられない思い出になった。

クライストチャーチに 20:10”到着

やっとの思いで到着、夕食はエイボン川のほとりにある「さらさら」で日本食である。すし、さしみに味噌汁は白味噌だった、たいした内容ではなかったが久しぶりの日本食はやはり旨い。

今回の旅で食べ物の好みが合う、合わないはとても大切なことだと感じたしだい。そしてキングスゲート.オートロッジに到着したのは22:00”を回っていた。明日はいよいよ最後のオークランドへ移動する。

七日目

ニュージーランド観光最後の日

6:00”のモーニングコール、ホテルで朝食を済ませて7:30”にホテルを出て空港へ向かう。ここで５日間われわれを案内してくれたミスターエディスとお別れである。バスを降りる時に「ユアードライビングテクニックイズベリーグッド.サンキュー」と伝えた。

オークランドへ向かう

8:40”のNZ-508でオークランドへ、出迎えてくれた運転手は大柄なシルビア女史。こちらでは女性の社会進出はかなりすすんでいる、首相も女性なのだから日本とはかなり違う。一旦ホテルに入り休憩、このあとはオプションになっているのだ。ホテルはハーバー近くの街中にあるコンプソーンハーバーシティーホテル四階の３１１号室。窓からは街の景色や港が良く見える。オークランドは捕鯨で栄えた街で、シティーオブセール(帆の街)と呼ばれ四世帯に一世帯はヨットを持っているという。

11:30”オプションのワイタケレの森とワイナリー見学に出発した。ガイドは菅原さん、彼の話では街中の路線バスはストライキで全部止まっているのだとか。運転手は平均アワーレート2000円というから、週休二日で32万円程になり悪くはないと思うが------。

料理はまずいが庭は最高、向こうに見えるのはブドウ畑

まずはクメウのレストランで昼食、これがちっとも旨くないのだ。パスタというが、これはきしめんにマヨネーズをかけたものに葉っぱだけのサラダ。13:30”ノビロのワインの試飲、工場見学もブドウ畑の見学もない。ワインを買ってくださいツアーなのだ、つまらん。

まるで植物博物館のワイタケレの森

ここから３０分程走りワイタケレの森に到着する，街中から程近くの所にすばらしい森が存在する。ガイドの菅原さんがいろいろな木について説明をしながら、森の中を歩いた。しかし、マイクがないので近くにいないとよく聞こえない。少し工夫してくれたら、もっと楽しい散策になると思った。
カウリの木-----成長は遅く、自ら枝を落としていくし皮もおとしていく
マカカの木-----殺菌作用がある
キャベツの木---キャプテンクックが野菜の代わりに食べた
マヌカの木-----蜂蜜がとれる
もっとも多いのはシダ類で、エアーニュージーランドの尾翼のマークもシダの芽を描いている。

シダ類が多い

展望台にて

わずかな自由時間にビジターセンターをのぞき、展望台から周りを見渡すとシダの森が広がっていた。

思わぬアクシデントが!!

オプションのツアーも終り、オークランドに帰り免税店で解散となった。友がタバコが欲しいというので店内を回って探すが、ちっとも安くないので買わずに店を出た。私が先に店を出たその時、あとに続いていた妻が階段の一番下の段を踏み外して転倒した。思わず何をしているのと言ってしまったが、すぐ駆け寄ったが妻は立ち上がれない。捻挫してしまったのだ。

しばらくそのままにして、立ち上がるも歩けないので肩に手をやりびっこしながらホテルに戻った。妻は子供の頃からよく捻挫をしたそうだが、ここにきて転ぶことはないのに、それもポケットから飴をだそうとしていたというのだ。怒ってもしかたのないことで早速冷蔵庫の氷で冷やした。
このあとのオークランド湾のディナーセーリングを妻はキャンセルした。

星空のもとディナーセーリング

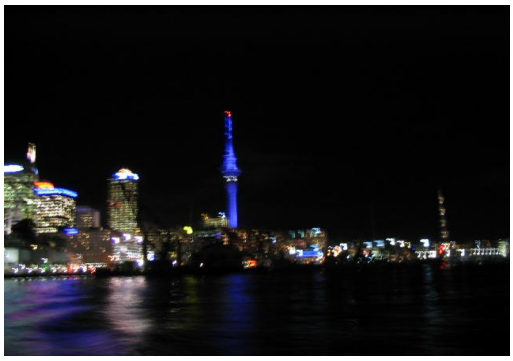
18:35”ロビーに集合してハーバーに向かう、５分で到着。妻のキャンセルで参加者は 11 名だった。
ヨットはチャレンジャー号全長 50 フィート(15m)、幅 14 フィート(4.3m)マストの高さは 22m ある、お値段は 3000 万円ほど。キャビンに入るとテーブルが６席あり、すべて座席指定である。キャプテンは半そでシャツだ寒くないのか!　いよいよ出港 19:00”～21:30”のクルーズである。

こちらは姉妹船のディファレンス号

串刺しの果物

街の夜景を見ながらヨットは進む、帆走しながら食事などどうするのかと思っていたらどうやらヨットハーバーに停泊した。
ここで食事が始まった、ワインのボトル１本を注文してまずはムール貝が次にスープ、フィッシュとすぐ隣の狭いキッチンで調理してだされる。雰囲気はもちろんまずまずの料理である、面白かったのは最後に出た果物で団子のように串刺しになっていた。たぶん船の中ということで、転がりもせず扱いやすいためと思われる。食事が終わるとハーバーブリッジに向けてエンジンで進み、そこから帆走に入った。同時に客に操舵をさせてくれるのだ。私もハーバーブリッジを過ぎてから操舵をした、まっすぐにいけというので目標の明かりを決めて舵を操るも、なかなかまっすぐには進んでくれず難しかった。でもそこはキャプテン「グッド」と言ってくれた。

オークランドタワーをはじめ、街の明かりがとてもきれいな夜景と、さらに満点の星空と南十字星に酔いしれたセーリングは、すばらしい思い出になった。


オークランドタワー

迷キャプテン

帰国の途に

捻挫すると紫色になるのだが妻の足首はそうでもなかった。夜眠るときは私が用心のため持ってきた腰痛の貼り薬を貼って寝た。
翌日は5:00”のモーニングコール、食事なしで6:15”にホテル出発である。足の具合は変わらないびっこしながら移動して、バスに乗るのが大変だった。こちらのバスは床が高いのだ、これはいけないと思い降りる時は妻をおぶって降りた。空港内の移動が大変なので荷物用のカートに乗せて移動、ここでガイドさんが気がついたらしくて車椅子を手配してくれた。
そのため出国手続き、飛行機への搭乗はみんなと別ルートでしかも席も変えてくれるというので、トイレの近くにしてもらった。
9:00”にオークランドを発ち、１１時間の飛行後無事セントレアへ17:00”に到着した。こちらでも車椅子で迎えてもらうことができ助かったしだい。捻挫したのが最後の日だったのがせめても慰めであった、病院へ直行して診てもらうもたいしたことはなく一安心した。
　こうして夫婦初の外国旅行はすばらしい景色に触れ、感動するとともにアクシデントもあり、忘れられない旅となった。